



天水秘傳

一會の付初心の連なり傳へし事一いつの
元人切老の宗通のふ及云西のここの目わらふと
是の短く白たのまの時初らぬまの事と宗通の
宗も宗のまの宗通切老の身をせ板十二の白と
白のい又身をせはるものまの初らる傳へ
十人ともあつて西の白つて身をせ一と例
の義をり

六宝雪菴
世文庫

一宗通終つてこの折るの白あり
この折る必あらざる事なり
此の折るは
此の折るは

手もつりか
二八寸法借有
けたり

花の白紙あきしやうすし一葉の白紙を
なすしやうすしやうすしやうすしやうすし
紙合の白紙をなすしやうすしやうすし
前にもなすしやうすしやうすし
この記すやうすしやうすしやうすし

一 世帯に連し人知能の物をもつ
一 花筆下文を硯懐中持持ちいひ
一 花筆下文を硯懐中持持ちいひ
一 花筆下文を硯懐中持持ちいひ
一 花筆下文を硯懐中持持ちいひ
一 花筆下文を硯懐中持持ちいひ

お見えなれば夜更けと名乗りのや

さしあつてわたり

ついでとつてはしの松の白くま

まはるといふはつとわたり

よしとつてはつとわたり

一巻の巻はつと名乗りのまはるといふはつとわたり

五百条、御傘

樞、山形編

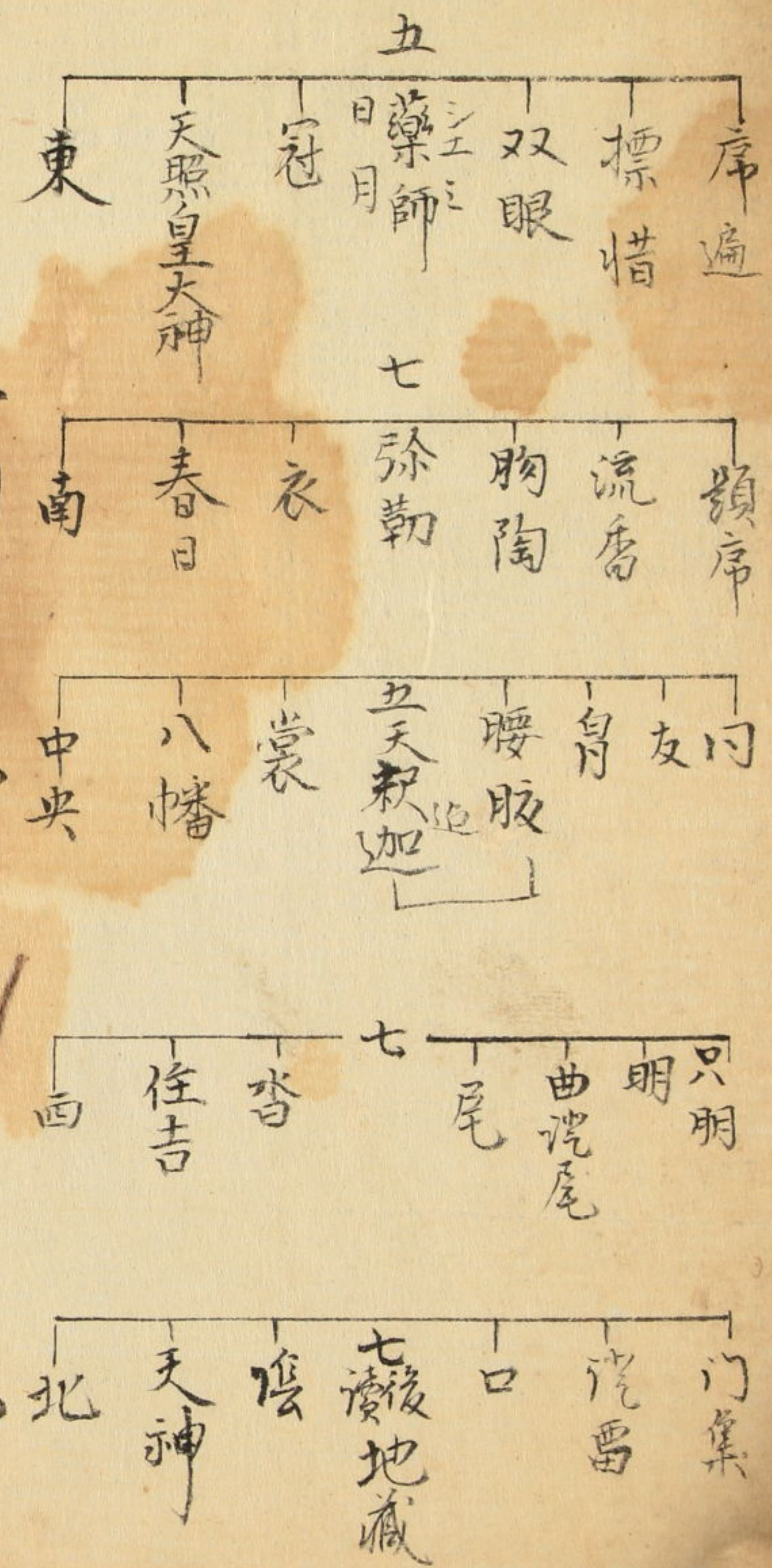
ついでとつてはしの松の白くま
まはるといふはつとわたり
よしとつてはつとわたり
一巻の巻はつと名乗りのまはるといふはつとわたり
まはるといふはつとわたり

一巻の巻はつと名乗りのまはるといふはつとわたり

まはるといふはつとわたり
よしとつてはつとわたり
一巻の巻はつと名乗りのまはるといふはつとわたり
まはるといふはつとわたり

山形編、樞、五百条、御傘

一巻の巻はつと名乗りのまはるといふはつとわたり
まはるといふはつとわたり
よしとつてはつとわたり
一巻の巻はつと名乗りのまはるといふはつとわたり



右の通りとて別して又又又の行後と
 追々能く味をいし
 諸の義意志中子たりとて丸くお傳の
 通りの口傳私して不て免物と成り

師通の傳りてこの傳法にて授ふるし
 そはつ代とて人より外もふらん
 萬の心は道とてちて成するもの也
 一切の道とお傳りて天りて人といふ
 人々貴人き人といふ人々福祿のなる
 人の心も心お傳りてその道の光りて
 しに心もつて心もつて心もつて心も
 無くして心もつて心もつて心もつて
 の功積りて初めは心もつて心もつて
 心もつて心もつて心もつて心もつて
 心もつて心もつて心もつて心もつて
 心もつて心もつて心もつて心もつて

外に聊あることを免す事なれども
累々たる馬車の上より如の思案たる
世に世に之のうちにたる事と傳へられ我天に
名くをねりたる人をも明色の界を教へて
後人の評判を教へる界を語らざる中
智を漢として人々を悪くし中子有る
夫らありて射殺せん事と智を漢の
あつた鹿を唱ふの如く善くして我々の
驚るる事と傳へたる事と傳へたる事
あつた事と傳へたる事と傳へたる事
あつた事と傳へたる事と傳へたる事

さうして亦中子の如く事と傳へたる事
苦くして度々たる傳へたる事と傳へたる事
云加者か悪く力棄くして馬引たる事
以りて軍士の必射殺する人歎の馬たる事
後を同くする家の人と甲乙を他と善くする事
笑へて相する昔相りの軍師の死の事
馬車に其人の言を能く伝へたる事
馬の中子とて其業の事と傳へたる事
歌より伝へたる事と傳へたる事
馬車の中子とて其業の事と傳へたる事
馬車の中子とて其業の事と傳へたる事
馬車の中子とて其業の事と傳へたる事

その心も傳へてゝ其の天下の能はる
の事あれ、ふたれもわし、我もし、文も書きた
る、人をも、はらへて、口は、傳へ、傳へ、傳へ、
傳へ、大畧、自己の、物、知、る、事、を、
和、交、り、傳、達、の、中、を、し、ま、す、と、代、の、大、和
交、れ、根、源、を、理、を、通、く、心、を、知、り、ま、す、と、
二、条、の、論、を、あ、ら、わ、く、別、に、師、と、定、の、傳、授
ま、す、事、も、あ、り、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
自己の、心、を、傳、へ、て、物、を、知、り、ま、す、と、い、は、す、と、
と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、

然、武、家、の、理、を、申、し、と、あ、ら、わ、く、と、い、は、す、と、
物、を、知、り、ま、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
つ、た、り、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
の、事、を、知、り、ま、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
法、の、事、を、知、り、ま、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
事、の、事、を、知、り、ま、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
傳、達、の、事、を、知、り、ま、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、

お、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
い、ま、も、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、
と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、

一、三系... 返... 美...
 ... 天...
 ... 神...
 ... 九条...
 ... 源氏...
 ... 修...

... 天...
 ... 九条...
 ... 源氏...
 ... 修...

今昔のわなを抄めく人のあはれく
 いづれもまじくたまたまにみたりと
 あらわすもなほかたがたなりて
 しかるに中々いづれもいふこと
 ありてはわづらひつひつの人を教
 へていふこといふこといふこと
 悪道了んぬる人もたつと和國の
 ような旅する人もいふこといふ
 こといふこといふこといふこと
 定家公のまゝにききとくといふ

大代まじりて龜沼はついで
 ことなる東家記のいふこと
 のまじりていふこと定家公の
 こといふこといふこといふこと
 統制のまじりていふこと
 こといふこといふこといふこと
 こといふこといふこといふこと
 あらわす古今の序のいふこと

僧人草事宗利不用詠和
 富原金海而骨末腐土中
 名先滅於世上過為後世
 被知者唯和歌而已

とていふは、
与能く、
の能く、
後、
福、
人、
さ、
中、
お、
い、

か、
又、
今、
も、
と、
連、
ち、
七、

ちきりし神紙ししりかかきしし大馬布
此書此紙の目と及福神の事ありしをりし
神紙の事ありし福神の事ありしをりし
よし西の白のくらしし文書ししきり
此紙の神紙大馬布の釋教ししをりし
又奇書しし出るありしし武書しし西の
新書ししありし人傳しし嫌ししし人
をかりし富井たれし陸防ししし
しし武書ししわけしし西の武書しし
しし新書しししし但新書しししし
しし分の法ありしし人傳しししし人傳し

媽りの信しし并のししし今時の文書ししおの歡音
梵至文殊菩薩の書ありし大士武の書ありし武の書ありし
連或い大師回師武の法ありし武の書ありし武の書ありし
信のししし奇書ししししししししししししししししししし
信しし媽ありしし又名しししししししししししししししししし
此書此紙の目と及福神の事ありしをりし
おのち徳法師 彦立門信しし信しし信しし信しし信しし
ししし信ししししししししししししししししししししししししし
わししししししししししししししししししししししししししししししし
信しし信ししししししししししししししししししししししししししししししし
ししし信しししししししししししししししししししししししししししししししし

師 熊也は兵部少輔の半塔のよりの新殿
人倫はあつてはけしむる官名に人倫
賜ふもあつたはけしむる官名に人倫
は人倫に人倫に人倫に人倫に人倫に
官名に人倫に人倫に人倫に人倫に
はけしむる官名に人倫に人倫に
お好太のよりの官名に人倫に人倫に
の后少輔少輔の官名に人倫に人倫に
若くは官名に人倫に人倫に人倫に
る約に人倫に人倫に人倫に人倫に
是れは人倫に人倫に人倫に人倫に
お別れは人倫に人倫に人倫に人倫に

女房のよりの官名に人倫に人倫に
是れは人倫に人倫に人倫に人倫に
すれは人倫に人倫に人倫に人倫に
らぬは人倫に人倫に人倫に人倫に
是れは人倫に人倫に人倫に人倫に
云ふは人倫に人倫に人倫に人倫に
るは人倫に人倫に人倫に人倫に
は人倫に人倫に人倫に人倫に人倫に
るは人倫に人倫に人倫に人倫に
り官名に人倫に人倫に人倫に人倫に
是れは人倫に人倫に人倫に人倫に

たゞし又字々より由老の句をぬきしに歌也
かゝる句は古きものなりしを記し居るに
の如くあれ我もあはれし人の礼にあは
れい曲懐のものをよして我も連ふしと云
ふは
そのありし頃の清き

きりぬ我ら
をらうらあゝ
そのうらなげの清き
人ぬしものうらなげの清き
中へも物さぬらぬら
今も昔も

元治遊
のうらなげの清き
かゝる事
中へも物さぬらぬら
究學

寛永廿一年

長以九十二
後身傳

切密の中

二五

のうらなげの清き
かゝる事
中へも物さぬらぬら

時ありし頃の清き
中へも物さぬらぬら

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

たのむはのむ

詩も知らざるもよき事なりと云ふ人の言はるるも白紙
の如しなり

一 てるの筆

の上

未だ知らざるよき事なりと云ふ人の言はるるも白紙の如しなり

筆の跡はかき消さるるもよき事なり

筆の跡はかき消さるるもよき事なり

筆の跡はかき消さるるもよき事なり

又 てるの筆

の上

未だ知らざるよき事なりと云ふ人の言はるるも白紙の如しなり

又 てるの筆

の上

思 筆を

中のふたるあしはよき事なり

流 筆を

一 おるの筆

の上

あ 筆を

一 おるの筆

あ 筆を

一 おるの筆

あ 筆を

一 おるの筆

我々もあつた人々もあつた

一平白知の... 地へ

... 地へ

六のうんの口傳

一自のうん... 地へ

一地のうん... 地へ

一さのうん... 地へ

一えのうん... 地へ

一寛のうん... 地へ

一法... 地へ

口傳

...

右巻... 加代末代

左巻... 地へ

...

...

...

天水秘傳卷二

そのいし世もは印 清一暮と持たし
のいし世もは印 清一暮と持たし
尚よ一も六十四句なり
のいし世もは印 清一暮と持たし
昔よ一も六十四句なり
無のいし世もは印 清一暮と持たし
空のいし世もは印 清一暮と持たし

あふ

あふ

あふ

あふ
坤の卦のいし世もは印 清一暮と持たし
一卦のいし世もは印 清一暮と持たし
たのいし世もは印 清一暮と持たし
のいし世もは印 清一暮と持たし
持たし
のいし世もは印 清一暮と持たし
世のいし世もは印 清一暮と持たし
のいし世もは印 清一暮と持たし
のいし世もは印 清一暮と持たし
のいし世もは印 清一暮と持たし

目いやくしんきも横糸じしめ款
ちのほしちのほしちのほしちのほし
船いあもしちのほしちのほしちのほし
ゆふもしちのほしちのほしちのほし
ゆえのちあしちのほしちのほし
るしちのほしちのほしちのほし
かき川の堤防あしちのほしちのほし
色のちのほしちのほしちのほし
増しちのほしちのほしちのほし
新時ありしちのほしちのほしちのほし
初らふ身ちのほしちのほしちのほし
古車履

あしちのほしちのほしちのほし
あしちのほしちのほしちのほし
屋のちのほしちのほしちのほし
わちちのほしちのほしちのほし
ちのほしちのほしちのほしちのほし
ちのほしちのほしちのほしちのほし
古屋のちのほしちのほしちのほし
目のちのほしちのほしちのほし
ちのほしちのほしちのほしちのほし
ちのほしちのほしちのほしちのほし
ちのほしちのほしちのほしちのほし
ちのほしちのほしちのほしちのほし

おんまゝに誠前るるかきうの情
あやめぬを乳香やそくせん
みまゝに心なるものぞ歌の歌
魚梅も平云々もそくせん
そいかに平雲の系雲の系
雲の中の中の中の中の中
のきぬを吾もそくせん
雲の中の中の中の中の中
るもの後々回地もそくせん
来世も親もそくせん
雲の中の中の中の中の中

物計と魚もそくせん
魚もそくせん
まゝにぬもそくせん
かゝるぬもそくせん
鱗もそくせん
物もそくせん
大もそくせん
中もそくせん
くせぬもそくせん
まゝにぬもそくせん
まゝにぬもそくせん

川のさしりしりたりのあふふま
 河堤も袖のともりくうらみり末
 草下も血の身をともり地鼓りしり
 物末も山持くともりやみ休りしり
 物末も能く入路の西にくともり
 流るる水も一せりやふせきみり
 ことさくともせりまもりほくまもり
 ことさくとも九字もあ特のれさるんて
 風名の好く物持のまをんりしり
 ことさくともゆりやふもりあもり
 物もりれりりりりりりりりりり

雲のきけにしりしりしりしり
 忠綱の流にさくとも川流り
 岸下も口もりもりもりもりもり
 岸下の木もあもりもりもりもり
 まもりもりもりもりもりもりもり
 ことさくともれりもりもりもりもり
 業平のこもりもりもりもりもり
 雲もさくともあもりもりもりもり
 事終りもりもりもりもりもり
 ことさくともあもりもりもりもり
 ことさくともあもりもりもりもり

死ししこりきや くらめらん
よのうらまゝあけし 芝築代
竹の根の交わぬ 堀り 上ちし
武蔵ののしこりまゝいひちうし
まゝいひまゝの 掘り 堀り 本
向らりの堀の 先まゝいひし 筑
かゝりしうらまゝいひし 筑
ちのうらまゝの つしつしつしつし
雲のあゝちまゝいひし 掘り
神のまゝの 掘り 掘り 掘り
吹毛のまゝの 掘り 掘り 掘り

南象のりししししししししし
おろししししししししししし
おろししししししししししし
かゝりししししししししししし
ししししししししししししし
るもの代ししししししししし
目おろししししししししししし
かゝりししししししししししし
ししししししししししししし
ししししししししししししし
城のりししししししししししし

本生自りトアリ
菊壇ト文キアリ

多岐なりし肌障り多し一命なり
 因きしふる菊壇にありしあまの
 身は後りまのひふりし紙に
 いらしむるはくちしるしむら
 笑しむるはくちしるしむら
 屋にむらむらしむら一古佛
 ひしむらむらしむら身しの紙
 ひしむらむらしむらあまの
 ちきしむらむらしむらむら
 老僧やひしむらむらむら
 りれしむらむらしむらむら

幼のころ一定なるありしむら
 筋骨のむらむらしむらむら
 流然ありしむらむらむらむら
 照くむらむらむらむらむら
 梳るむらむらむらむらむら
 懐きむらむらむらむらむら
 古楊枝のむらむらむらむら
 能んむらむらむらむらむら
 らむらむらむらむらむらむら
 懐きのむらむらむらむらむら
 文をむらむらむらむらむら

つゝいふころころん 四出の波
りや甲の地つゝいふころん 波對馬
おのふ横さくらくゝいふころん
いふの横さくら福島の 糸やうめ
おんころり箭の海さくらころりめ
さくらころりやうらさくらころり
境端さくらころんさくら 係さくら
さくらころり何年さくらころり 老
玉ころり廿秘苑さくらころり 別
上作の刀の穂字さくらころり
減さくらころりあさくらころり

ころり西の 指のさくらころり
大指さくらころり 矢野さくら
さくらころりさくらころり 源
初めさくらころり鞠のありさくら
いふさくらころり知ぬ亭さくら 庵の
御師さくらころりさくらころり 柳
さくらころりさくらころりさくらころり
めんのさくらころり少利さくらころり
あんころりさくら 柳のさくらころり
騎解のさくらころりさくらころり 洲
さくらころりさくらころりさくらころり

おんまゝかゝりてのいふ切
さかすまのしほのいふあり
こしの押もむいふあり

右三百二十五のいふ
おんまゝかゝりてのいふ切
さかすまのしほのいふあり
こしの押もむいふあり
おんまゝかゝりてのいふ切
さかすまのしほのいふあり
こしの押もむいふあり
おんまゝかゝりてのいふ切
さかすまのしほのいふあり
こしの押もむいふあり

おんまゝかゝりてのいふ切
さかすまのしほのいふあり
こしの押もむいふあり
おんまゝかゝりてのいふ切
さかすまのしほのいふあり
こしの押もむいふあり
おんまゝかゝりてのいふ切
さかすまのしほのいふあり
こしの押もむいふあり
おんまゝかゝりてのいふ切
さかすまのしほのいふあり
こしの押もむいふあり

知りしをいふことなきのちもいふことなきの如く有りしに
の秘傳を知らぬ宗匠新傳の如く有りしに
その如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに

里村易体の人と述奇する宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに

一 千句の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに
宗匠の如く有りしに宗匠の如く有りしに

一 右妻の句三句夏の句二句
秋の上三句の月新 月 菊 冬二句の氷
神楽 因心 句三句

右お徳のこと

又花はりの貴方兼月一様
 子句七も拙書にこそ
 むつしあものくちし
 縁お徳を信じて
 八九人十人十人十人
 白折九定あり後
 け後お徳一
 あくくあものくち
 徳一
 名切書

元日雪り雨の時
 孝の書のかつ毎
 連文
 此つお徳
 七つ人
 天
 御加
 去例

わらわらぬるまのしるさるる昔福しほし
なすくあつたはくしるのたのむるしほし
しるのしる

たしるしるのたのむるしほし

あつたはくしるのたのむるしほし

わらわらぬるまのしるさるる昔福しほし

なすくあつたはくしるのたのむるしほし

しるのしる

あつたはくしるのたのむるしほし

わらわらぬるまのしるさるる昔福しほし

なすくあつたはくしるのたのむるしほし

あつたはくしるのたのむるしほし

わらわらぬるまのしるさるる昔福しほし

なすくあつたはくしるのたのむるしほし

しるのしる

あつたはくしるのたのむるしほし

わらわらぬるまのしるさるる昔福しほし

なすくあつたはくしるのたのむるしほし

しるのしる

あつたはくしるのたのむるしほし

わらわらぬるまのしるさるる昔福しほし

なすくあつたはくしるのたのむるしほし

二名の事は傳はるる中より

目録のあらう物もあらう

〜のまじり

名もあらう月と桂やあらう

あらうのまじり

其れをそのまじりたるものなりとの傳はるる

とあらう〜のまじりたるものなりとの傳はるる

〜

一 〇一 〇一 〇一

ある

中より、

秘のあらう事

〜のあらう事

〜のあらう事

〜のあらう事

〜のあらう事

〜のあらう事

〜のあらう事

〜のあらう事

〜のあらう事

〜のあらう事

秘のあらう事

まじりぬれぬる人へはさるるにほく

然る方とてはあつた梅

うらたふらふらあつた梅

と女へのよみまじりぬれぬる

十のちまひまじりぬれぬる

つや うらたふらふらあつた梅

一りあ うらたふらふらあつた梅

一か 物うらたふらふらあつた梅

一せ うらたふらふらあつた梅

一む 物うらたふらふらあつた梅

一ぬ うらたふらふらあつた梅

まじりぬれぬる人へはさるるにほく

然る方とてはあつた梅

うらたふらふらあつた梅

と女へのよみまじりぬれぬる

十のちまひまじりぬれぬる

つや うらたふらふらあつた梅

一りあ うらたふらふらあつた梅

一か 物うらたふらふらあつた梅

一せ うらたふらふらあつた梅

一む 物うらたふらふらあつた梅

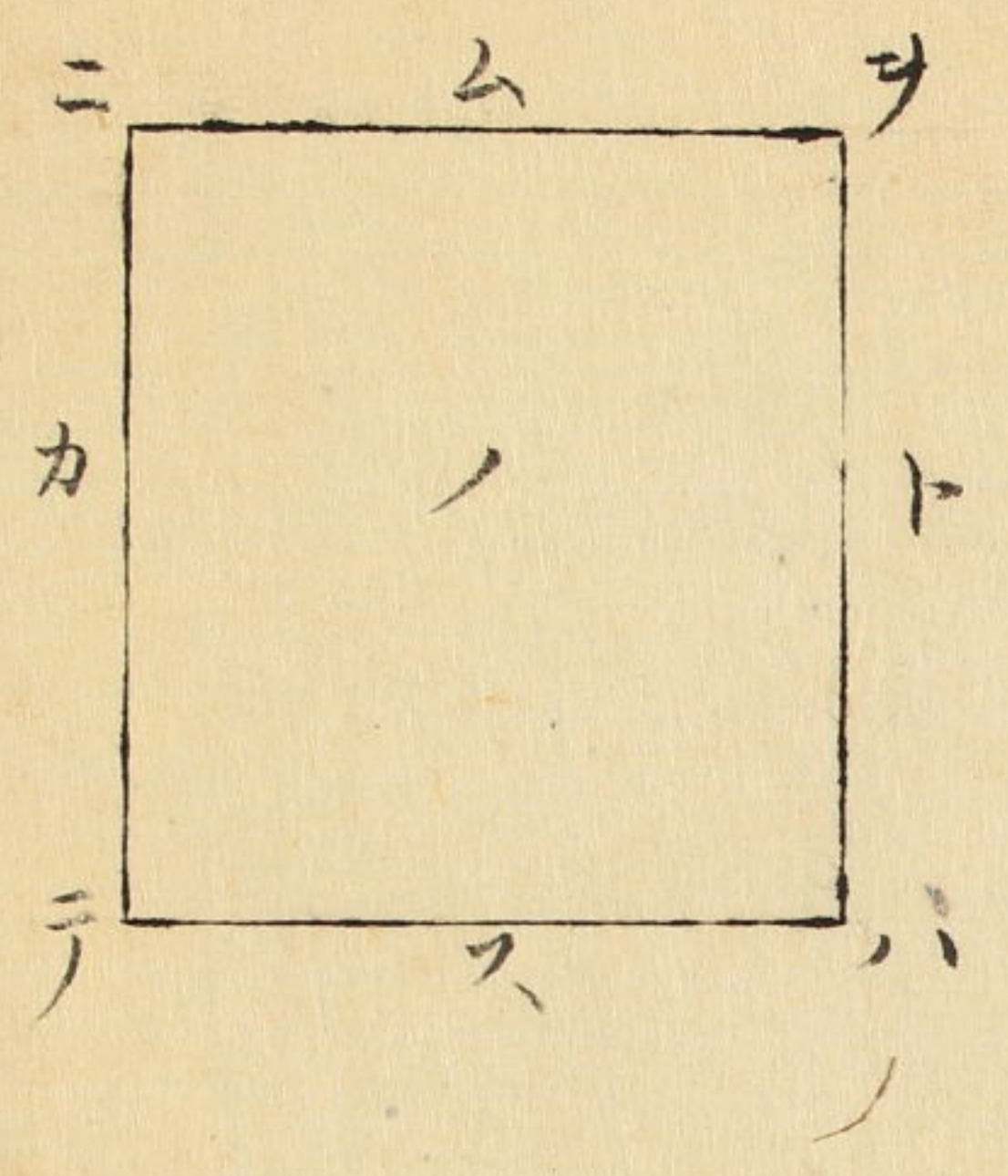
一ぬ うらたふらふらあつた梅

一うに からぬらあつた梅

あつた梅のあつた梅

あつた梅のあつた梅

五言のあつた梅



中三子神のあつた梅

花の袖 あつた梅のあつた梅

上あつた梅のあつた梅

櫻吹 山のさくら 弱しんく

あけぼのさくら 十神のむね

梅のさくら 三郎のむね

子白あふ 櫻井 三名付のま

一日 櫻井 十の人 九の人

二日 櫻井 九の人 八の人

三日 櫻井 八の人 七の人

四日 櫻井 七の人 六の人

五日 櫻井 六の人 五の人

六日 櫻井 五の人 四の人

七日 櫻井 四の人 三の人

名代 櫻井

バ せらるるの由 五の人

名代

尤 老人上人 一の人

二の人

十 老人上人 一の人

二の人

右取の 一うり 作者の名

一 四句目 八句目 ありて

文のまじり せり する

一 花 櫻 花 けり

花のまじり けり 花のまじり けり

一 櫻 花 けり

花のまじり けり 花のまじり けり

一 梅 櫻 花 けり

花のまじり けり 花のまじり けり

一 花 名 の まじり けり

花のまじり けり

一 名 の まじり けり

花のまじり けり

一 櫻 花 の まじり けり

花のまじり けり

つ代ふうかうりうかうの義は拙白中うふやまう
字々めいせいしゆいつのわひく

又平のよるの草

一車もよふめて ささとかみぬけをきききし
わあ~~~~

昔の草紙の草

一帯のあつちりうも 韻のなほあつちりう
つるの中 何方めてもさあうちをぬき

以上

韻の帳紙能くつらぬ草

一上りふの四季に四色の幣を用ふるころに世代々

只だの果と用ふるむかゆ紙共うのし 後にもまの
らうかすつ 二条おち条家のつらり目を先二条
家が二条首とそその歌に二紙とすき口四寸とさう
歌の字々も草 又何その和文と書ふるに 上たう
つ字潤にま~~~~と世代りけり本々歌と歌とのら
つ寸し縁~~~~一ま~~~~つりて歌と歌と~~~~
二縁~~~~一丁書歌~~~~又一寸で隔く我々を
歌~~~~縁の~~~~とて古者友の人の官名又~~~~
に古者の人に姓名を~~~~ 傳~~~~傳のま見の姓名を
本々房の~~~~又縁を~~~~の~~~~
つその~~~~口四寸縁歌が~~~~の~~~~

のふにこそそのあひのてし〜一紙〜ま〜ちりてま〜
必し道〜ら〜ら〜字四〜あ〜も〜ぬぬ〜ら〜
ら〜ら〜ま〜〜ま〜名を直〜ま〜〜名〜
我名い〜も〜早〜紙の〜つ〜ま〜
ま〜人〜よ〜ま〜ら〜七字〜ら〜ら〜ま〜
極くた〜く〜い〜く〜の〜

詠 三首和歌

千鳥

なま〜〜甲〜か〜け〜ら〜
さ〜ら〜ら〜りよ〜む〜あ〜
〜の〜ら〜む〜

めけそあ又
こけいんあ

詠 二首和歌

寄和歌

君〜代〜の〜ら〜に
ま〜ら〜れ〜あ〜せ
の〜は〜ま〜さ〜の〜
め〜ま〜

右和歌の半や〜是も〜分別有へ〜

一 方よ〜も〜紙〜も〜文の〜ま〜ま〜又抽書の一大
る〜四〜二四〜二四〜二四〜二

志のら〜

れあ〜

らつら

つて地

とものや

あふ

そふい

七好

如所文の袖半むねはほく半やうし

一内裏院家奉りかゝ懐帛のよと包こり
あゝ文量く不文量の傍り包こり又
大長家法々衆のいよと包よのそと又

不文所を指すのよと包こり
一巻を握るゝ文を半よのありり
遠かめりて日一巻を屏風障子のあつ書平人
のあつるゝあつる高家天子の能事
半なり

一古家平人のあつて文を半よの書はき筆末の
真よ半よの自伝自白のあつるありのり
振よ半よの又うあものよ朱あつ押
あつる

一と紙書あつる海影よ半よの婦人
半あつるあつるあつるあつるあつる

了也

色紙終丹寸法之事

一 大色紙の横五寸八分口傳

一 小色紙の横三寸五分 二百字日と書 横二寸八分口傳

又中紙の右こしの中をうろち大色紙の横三寸五分横寸五分 あつてうろちの多

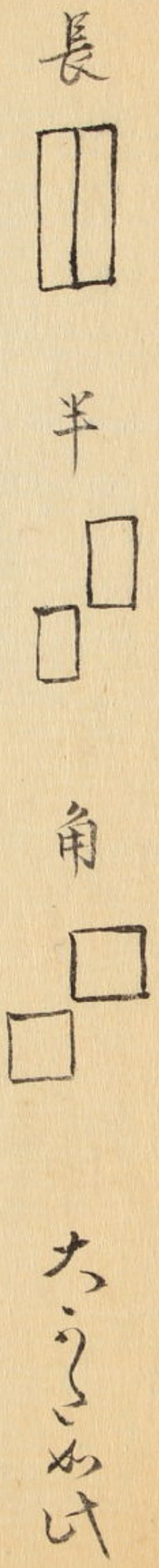
一 大終丹の横三寸五分紙終丹の横二寸八分

く又終丹の横三寸五分

一 小終丹の横三寸五分横九分

右のしこちの曲入寸と終丹也

色紙終丹等尺法終丹の押縁の寸



是等商家也

文臺寸法之事

横一尺五分横二尺九寸

終丹九寸五分口傳

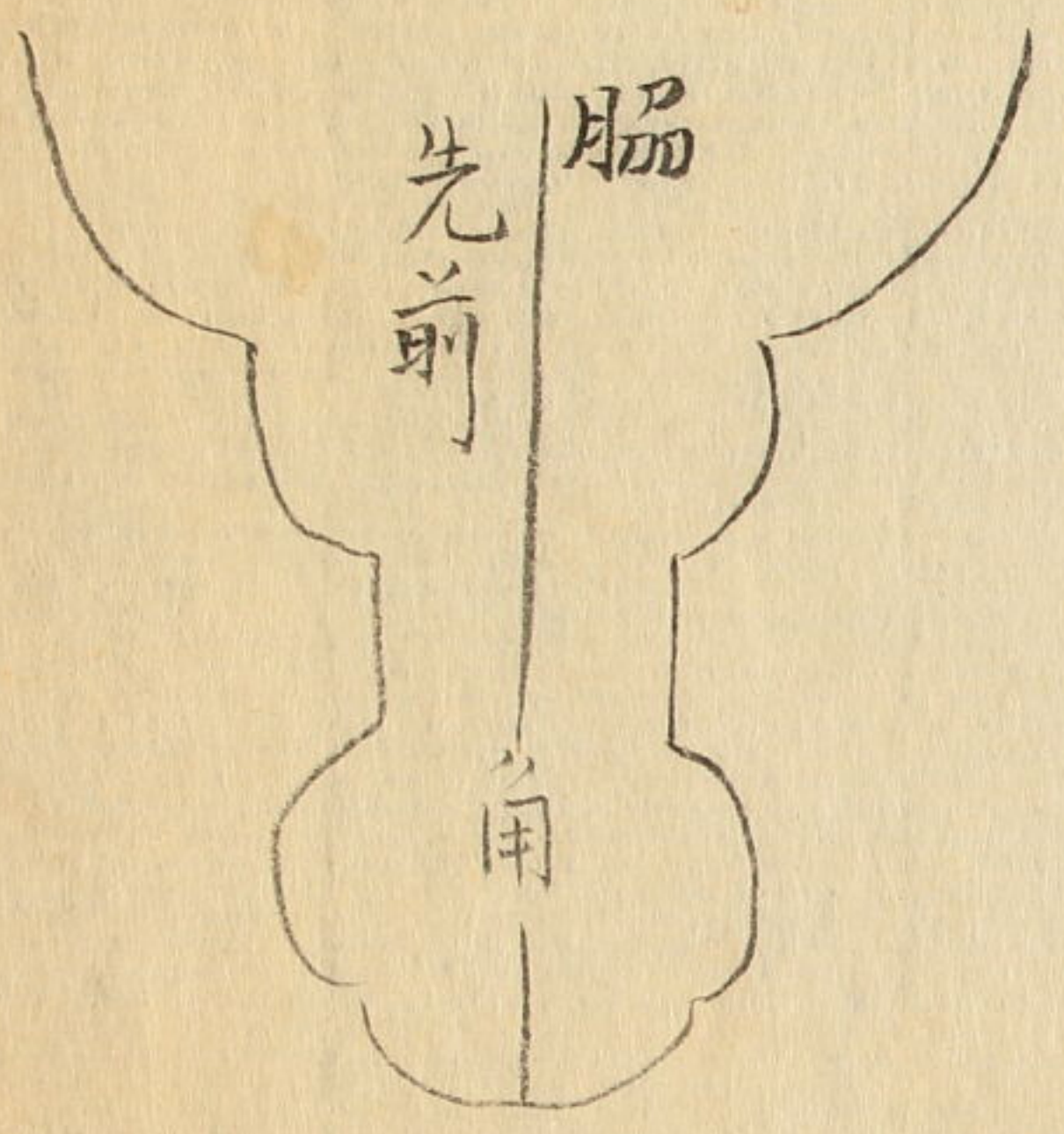
ちりま板の厚サ三寸五分

高サ三寸五分右のしこちの

曲入ら終丹の世字知人

深くは

終丹の寸法



亦く條く秘事家く眞儀く能く

有らばこの考究賢

夫何浩の激怒く其まき一陽くさく裁りて
さくし林京くふくものわく用ひてその山宣教くきんわ
凌谷してやききと着上達光り流るるすく源流
とす知んくを流る流り水もく他の家の風は
用ひるものく良海翁の記してそが以てるく
中結しての目るあく自書してはくはくはくは
さくはくはく宜い雅歌くはくはく印後く授く
平巻くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

却るはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
もははくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
是くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
ふはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
亦はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
因縁はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
時く自筆くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
水禁る百活物き紙のふりまをくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

天の如くもつる木の厚み
 鳥の如くもつる木の厚み
 おのづからいふ事ありしむ 完結

舟西卷者老師長頭翁一真也也拳世
 年我他彼世老師遂輯以道至要名曰天水
 蓋欲便其津消融之乎終不敏抱其門下
 師子之千是有年矣一日進曰敢許一卷為
 守教也以拙之約老師不許止許之乎受
 弄是於是卷而憶之為家珍也後未有定
 中子名以中中可授也但門人以三人之限
 之習之乎中他凡國作完學可知

鷓冠井九帛在東門耐

良德 五刻

廿二應以年

成保印在日

六世

卷之三

可尊





卷一

一

一